20260419　朝礼拝　テサロニケの信徒への手紙一 5 章 16～22 節

「なぜ感謝できるのか」

福井県私立幼稚園・認定こども園協会では「養成校と園との交流会」というイベントが開催されています。福井県私立幼稚園・認定こども園協会の主催で、養成校、つまり幼稚園教諭や保育士を養成する学校。例えば仁愛大学や仁愛短期大学などとの情報交換、懇親のための企画です。決してお堅いイベントではなく、立食形式のパーティーといった感じで、お酒も振る舞われます。余興の時間もあって、私立幼稚園協会の若手の理事たちが駆り出され、創意工夫を凝らした出し物をします。昨年の場合は、「わたしの園クイズ」なるクイズ大会が行われました。

事前にいくつかの園から、自分のところの特色を題材にしたクイズを出題するビデオを撮ってもらって、それを会場で流して、養成校の先生方に答えていただく、という趣向です。敦賀教会幼稚園からは、当時、年長担任だった岡林教諭と、年中担任だった渡教諭がビデオ出演し、敦賀教会幼稚園にまつわるクイズを出題してくれました。こんな感じです。「敦賀教会幼稚園が、毎週月曜日にしていることは何でしょうか？　1：体操　2：聖書読み聞かせ　3：礼拝」。まぁ、皆様は、答えがすぐに分かると思いますが、正答率はかなり低かったですね。

答えが明かされた後で、私がコメントを求められたので、何を話そうかと考えた末、「この礼拝をしている礼拝堂というところでは、入園式もします、卒園式もします、誕生会もします、生活発表もします。あと、結婚式も挙げますし、お葬式もここでします。人生の色々な大切な瞬間を受け止めてくれる場所ですね」と言いました。「お葬式もここでします」と言った時、会場から「へぇ」とか「ほぉ」みたいな声が聞こえてきて、意外に思われるんだなぁ、と、逆にこっちが意外に思いました。この界隈に長くいると、礼拝堂でお葬式って普通なことです。人生の全期間に関わること

を「揺り籠から墓場まで」と言ったりしますが、教会ってまさにそんな感じですよね。幼稚園とくっついている敦賀教会の場合、特にそうだと言えます。

キリスト教で、ご葬儀をする時、ご葬儀も礼拝の一種なので、聖書を読んで讃美歌を歌って、牧師がメッセージを語ります。読み上げる聖書箇所は、故人が生前に好きだったところ、これを「愛誦聖句」と言いますが、故人の愛誦聖句を選ぶのがセオリーです。

しかし、このセオリーは、時に牧師にとって試練となる時もあります。今日の聖書箇所は、とても有名で愛誦聖句に定めている方々も多い。だから、牧師は時に、今日の聖書箇所で葬儀のメッセージを語ることもあります。教会の中にいる人にとっては、それは別に違和感があるワケでも、変に思うワケでもないかも知れません。でも、教会の外にいる人たちにとっては、どうなのか、と。大切な家族や友人の死を悼む場で、牧師が恭しく「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」と聖書を朗読し、喜びと感謝を勧めるメッセージを語るのです。その様子と言うのは、もしかしたら異様に思える、かも知れない。「じゃあ、なにか、このお葬式でも喜び、祈り、感謝しろということなのか」と。そう思われても仕方ない節があります。もちろん、そんな意図など全くありませんが、言葉とは、自分が何を意図して語ったかよりも、相手が受け取って何を感じたかの方に重みがあります。言葉って、聴き手がどう受け止めたのか、と言うのが、より大事なんですよね。

故人のご生涯を振り返り、ご遺族からお話を聴き、弔問に訪れた方々にお声掛けしながら、「んー、どう語ったものか」と。せっかく好きな聖句を残してくれたのだから、どうにかして、これを慰めとして、福音として語りたい。まぁ、それが牧師のお仕事ってやつですよね。

一つの解釈として、今日の聖書箇所は、私たちが生きる現実の「受け取り方」を教えているのではなく、「選び取り方」を教えているのだと、私は思っています。良いことも、悪いことも例外な

く、過不足なく起こり得る世界を私たちに生きています。大切な人と出会うこともあれば、大切な人と死に別れることもある世界です。そんな幸せ一色ではない世界にあって、ただただ降り掛かる出来事に対して受け身であることを止め、でも、どうやったら一つでも笑顔を増やすことができるだろうか、と自ら探しにいく、そんな生き方を、この聖句は提案しているんじゃないと思うのです。

一つ大事な視点として、私たちには、どんな状況でも選べる自由があり、その権利を誰もが有しているということです。悲しい時に、悲しいところで立ち止まって浸り切るのも、もちろんその人の自由です。そして、悲しみに浸り切ることで得られる、深い納得や知恵もあると思います。一方で、もし、悲しみに満たされた日々の中にも、なにか喜びが残されているはずだと信じて、それを探そうとする、掴み取ろうとする信仰と知恵があるのなら。明日から続く毎日が、ちょっとだけ変わるかも知れません。

先ほどのご葬儀の際には、こんなメッセージにしました。「大切な人の死を悲しむ場に、多くの家族、友人が集まり、その悲しみを分かち合い、慰め合うことができるのは、それは、喜ばしいことですよね」と。無理に大切な人との死別の悲しみを忘れる必要はありません。悲しいのは、どこまで行っても悲しい。ただ、悲しみを悲しみのまま終わらせず、必ずそこに小さいかも知れないけれど希望や喜びを備えてくださるのが神様です。

イースターに復活されたイエス様が、その身に帯びておられたのも、きっと同じメッセージです。「とっても悲しかったね、でも、まだ終わりじゃないよ、これから良いことがあるよ」と。

「どんなことにも感謝する」という信仰の裏側にあるのは、「どんなことも感謝できるよう整えてくださる神様」への信頼です。身に降り掛かる苦労や悲劇を無理矢理に恵みとして認識するのではなく、苦労を苦労として耐え忍び、悲劇を悲劇として味わいつつ、その先に必ず用意されている神様からの希望を忘れないのです。

そして、「苦労や悲劇の先に祝福がある」という希望の最も大いなる先例が「イエス様の復活」なんですよね。弟子たち裏切られ、逃げられ。罵声を浴びながら十字架への道を歩み、その果てに与えられた死。しかし、その悲痛な死さえも乗り越え、一時逃げて離れていった弟子たちの前に、憐れみ深いイエス様は再び現れてくださったのです。

主の十字架だけでは感謝できません。苦労や悲劇や死だけが与えられて感謝するなんて無理な話です。けれど、その苦労や悲劇や死の先に「復活」が実現するなら。そうなって初めて私たちは主の十字架さえも受け入れて感謝の祈りへと至ることができるわけです。

神様を信じる、信じたいと願う、私たちの内にある霊の火を絶やさずに参りましょう。預言を始めとした聖書の御言葉は難しいけれど、ポイっと手放さず、しがみ付いて、齧り付いて味わって参りましょう。嬉しいことも、つらいことも。幸せなことも、不幸なことも。すべてを吟味して、しっかり確かめて喜びと感謝を数えて参りましょう。そういう風にしていたら、多分、自然と悪いものから遠ざかり、少しだけ心穏やかに、明日への期待をちょっと大きくして、歩んでいけるのではないでしょうか。

きっと世界は、そういう仕組みになっているのだと私は信じています。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」。はい、その準備はできてますよ、と。折が良くても悪くても、感謝できる準備はできてますよ、神様と。そう祈りながら、神様の祝福と恵みを大胆に掴み取りに行く。そんな１週間を共に歩んで参りましょう。最後にお祈りいたします。

神様。

今日も、私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝いたします。あなたの言う「喜んでいなさい」とは、「喜びが届くから備えなさい」であると信じます。「感謝しなさい」とは、「感謝に至る恵みを取りこぼすな」だと受け止めます。絶えず祈ることであなたの御心を尋ね求め、御言葉によって養われることで、この世の理不尽さえ解き明かし、今日もしなやかに強く、朗らかに逞しく。あなたの道を、イエス様の隣を歩んでゆくことができますように、導いてください。主の平和と祝福が、私たちの上に、そして、この世界に十分に注がれますように。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げいたします。